



戦後に執筆された、逗子が
登場する作品を知りたい

石原慎太郎は逗子の海に集う
若者の姿を描き、『太陽の季節』
で芥川賞を受賞しました。

伊集院静は『なぎさホテル』、
『作家の愛したホテル』で8年
滞在したなぎさホテルと逗子の
四季折々の風景や行事を綴って
います。

これらの文学作品には市内の
地名や地域の名称が登場し、逗
子が身近に感じられます。

◆そのほか◆

本の情報	請求 記号
『正力松太郎ープロ野球の父ー』 五十公野清一著 鶴書房 1966	783 イ
『おばあちゃんの教育論ー慎太郎・裕次 郎もこのおふくろには頭があがらないー』 石原光子著 ごま書房 1986	379 イ
『逗子の海』 窪田正子著 朝日新聞社 2008	P 914.6 ク
『作家の愛したホテル』 伊集院静著 日経 BP 社 2009	ZY 915 イ
『「うま味」を発見した男ー小説・池田菊苗 ー』 上山明博著 PHP 研究所 2011	F ウ
『海運王山下亀三郎ー山下汽船創業者 の不屈の生涯ー』 青山淳平著 光人社 2011	F ア
『わが人生に悔いなしー時代の証言者と してー』 なかにし礼著 河出書房新社 2019	ZY 911.6 ナ
『なぎさだよりー〈逗子・葉山・鎌倉〉暮らし 歳時記ー』 橋出たより著 第三文明社 2023	P 914.6 ハ

逗子が登場する
文学～戦後篇～



逗子マリーナの夕焼け 写真：逗子フォトより

逗子市立図書館

046-871-5998

逗子市に関するレファレンス事例は、逗子市立図書館ホームページで閲覧できます。

<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

本の情報・返子が登場する文章の抜粋	請求 記号
<p>『太陽の季節』 初出：雑誌「文学界」(1954) 石原慎太郎著 新潮社 1956 夏に入る前、葉山にあつたサマーハウスの準備にやつて来た英子が、ついでに返子の龍哉の家を訪れた時、彼は英子をヨットに誘った。</p>	ZY F I
<p>『三面鏡』 高見順著 中央公論社 1954 三十分ごとの電車を待っていると、「僕のお父さんの家は、返子なんだよ」少年が、ぼつんと言った。「返子？」思わず大きな声で、老人が聞きかえすと、「でも、もう、よそに移ったかもしれないね」「返子のどこ？」 「僕、ちっちゃい時分だから一忘れちゃった」</p>	F タ
<p>『蝕まれた友情』 『志賀直哉全集 第4巻』 初出：雑誌「海」(1947) 志賀直哉著 岩波書店 1973 佐久間の釣つて来た魚は佐久間が自分で料理をし、一人で食つてみた。或る日、干潮時に小壺の岩の上を歩いてみて、岩に自然に出来た井鉢程の窪みにゴンズイが四五疋、かたまつて入つてあるのを見つけ、刺されぬやうに手拭に包んで持ち帰り、これも佐久間が煮魚にして一人で食つてみた。</p>	918.6 シ 4
<p>『事故のてんまつ』 初出：雑誌「展望」(1977) 臼井吉見著 筑摩書房 1977 先生は父とわたしをつれ出して、返子のマンション・マリーナへ行った。無論くるまはわたしが運転したが、先生は、このときは、助手席でなくて、うしろの座席へ、父とならんで腰かけていた。</p>	F ウ

返子市立図書館に所蔵している本の一部をご紹介します。



本の情報・返子が登場する文章の抜粋	請求 記号
<p>『無言』 『川端康成全集 第8巻』 初出：雑誌「中央公論」(1952) 川端康成著 新潮 1981 鎌倉から返子へ車でゆくのには、トンネルを抜けるが、あまり気持のいい道ではない。トンネルの手前に火葬場があつて、近ごろは幽霊が出るといふ噂もある。夜なかに火葬場の下を通る車に、若い女の幽霊が乗つて来るといふのだ。</p>	918.6 カ 8
<p>『来し方の記・辰雄の思い出』 堀多恵子著 花曜社 1985 衣、食、住は生活の基礎となる三つの条件であるはずだが、住というのはやはり一番厄介なことかもしれない。軽井沢から返子に移った時は、辰雄の友人の好意に甘えたが、好意であるために長居は出来ないと考えていた。 神奈川県返子町桜山、切通し坂下、魚幸隣りという住所が、正確な表示ではないことはたしかだが、私たちは平気で手紙などにそう書いた。</p>	910 ホ
<p>『空から猫が降ってくる』 初出：雑誌「ミス家庭画報」(1993) 野中柊著 福武書店 1994 返子に新居を構えた。海辺まで歩いて五分足らず。風が柔らかく湿つていて、潮の香りがするのが心地よい。それに私たちの暮らすマンションには大きな大きな窓があり、そのすぐ真下に川が流れているのである。川べりに植えられた松の木が空に向かって枝を伸ばし、幾艘ものボートがゆらゆらと漂い、遠くに濃い緑に覆われた山が見えるのが何とも長閑。 「返子での暮らし」より</p>	914.6 ノ
<p>『狂骨の夢』 京極夏彦著 講談社 1995 昨日のうちに鎌倉に入り、駅前の木賃宿で一泊した。そして物好きなことに、伊佐間は鎌倉から名越えの切り通しを越えて返子まで歩いたのだ。</p>	F キ

本の情報・返子が登場する文章の抜粋	請求 記号
<p>『ノラネコ日記—乙羽さんとドブ君たち—』 新藤兼人えと文 弥生書房 1995 乙羽さんは、毎年返子へ、ワゴン車がいっぱいになるほど物を持って行く。近くの甲州屋という魚店で刺身を七人前と四人前を一皿ずつ。七人前はわが家族の員数。四人前は返子の家の近くの山内家へ。 「最後の正月」より</p>	914.6 シ
<p>『近くて遠い隣人—大仏次郎賞を受賞した堀田善衛君』 『本多秋五全集 第13巻』 初出：雑誌「三田評論」(1978) 本多秋五著 菁柿堂 1996 おなじ返子に住んだことが多分に関係しているだろう、堀田善衛の初期の作品は大てい読んでいる。互いに往ったり来たりもした。読んだのは『海なりの底から』まで位だろうか。それからあとはだんだん無精になって、あまり読まなくなった。往ったり来たりの間も遠のいた。</p>	904 ホ 13
<p>『しゃべれどもしゃべれども』 初出：新潮社(1997) 佐藤多佳子著 新潮社 2000 返子の駅から葉山方面へ向かうバスに乗った。駅前の商店街を抜け、しばらく町中を走ると、やがて海が見えてくる。沖は青いが、浜近くは海水浴客の水着の色でモザイクになった八月の湘南の海だ。葉山マリーナからさらに五分ほど乗ってバスを降りた。</p>	SF サ
<p>『神様のボート』 初出：新潮社(1999) 江國香織著 新潮社 2002 返子は緑の多い町だ。大きい家のならば広々とした並木道を通るとき、「ビバリーヒルズみたい」と、ママは言う。この町に引越して二カ月になる。あたしは先月中学生になった。中学校は神社のすぐそばにあり、大きくて新しい体育館の一階には、ハト時計がある。</p>	SF I